

Title	徳川時代に於ける農本の意義に就て
Author(s)	本庄, 榮治郎
Citation	経済論叢 (1920), 11(5): 693-698
Issue Date	1920-11
URL	http://dx.doi.org/10.14989/127717
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 卷 第 五 號

論 說

歴史と社會學との關係(一)……………法學博士 財部 靜治

地方税としての地租の課税標準……………法學博士 神戸 正雄

限界的生産力の勞賃説……………法學博士 田島 錦治

農業社會主義的土地改良論者……………法學博士 河田 嗣郎

價值論上のリカルドとマルクス(二)……………經濟學士 堀 經 夫

時事問題

北支那の飢饉……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

濠太利の貿易と海運……………法學士 小島昌太郎

徳川時代に於ける農本の意義……………法學士 本庄榮治郎

將來の産業的指導者としての日本及び其他の諸國……………法學士 石川 興二

京都市經濟學會第二回講演會記事……………法學士 大森 研造
國大學經濟學會第二回講演會記事……………法學士 汐見 三郎

保險に關する新著紹介……………法學士 小島昌太郎

徳川時代に於ける農本の意義に就て

本庄榮治郎

一

我國は古より農業が頗る重要な産業となつておる。勿論太古草昧の時代には漁獵時代が存在したとしても、牧畜時代といふものは、我國では通常認められず、上古の神話に於て既に早く農業に關することが頗る多く現れてゐる。而も人口の次第に増殖するにつれて、最早收穫の確實ならざる狩獵漁撈のみを以てしては、國民の需要に應ずる能はず、茲に天然に水利の便ある土地を耕作して食物の生産に従事し、且、歴代帝王の勸農政策によつて、農業は上代に於て既に

に我國一般の産業と化し、而もこの状態は近世に至るまで繼續した次第である。經濟發達の或る時期に於て農業が國民の主要なる産業の一として、一般に行はるゝ時代の存することは、階段説の認むる處であつて、別に異とするには足らぬ。

然し同しく農業時代といつても、かくの如き長き時期に亘つては、その間に、興廢隆替の存することは自然の數である。上古の人口少く土地廣く、陳放の原始的の組織によつた時代から見れば、大化以後の口分田の制、私墾田の開發から莊園の發生に至れる史實は、一方に於て農業の發達耕作段別の増加を示すものに外ならぬ。鎌倉時代から室町時代に至る一般の状態としては騷亂と聚斂とのために、農民の疲弊土地の荒廢を來し、農業は一般に進歩するに至らなかつたものであるが、戰國時代を経て安土桃山時代に入るに及び、やゝ發達の緒に就き、徳川三百年の太平の間に於て、農業は著しき發達を遂げ、耕作段別は増加し、各地に特産物が興り、

1) 拙著、經濟史研究、4-11 頁
Ernst Grosse, Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft. S.25ff.

外來作物も傳播し、疏水灌漑等の設備、農耕技術の點に至るまで大に進歩し、農業は我國産業の中心として最も重要なものとなつた。

二

さて、かくの如く農業は古昔から行はれて重要な産業とされたものであるが、徳川時代に於ては、農業は種々の理由から特に重要視されたものである。その所以は如何。

(一)我國は古來農業を以て國を立て、人民多數の職業が農業に在つたことは勿論であつて、徳川時代に入つては商業工業も次第に發達したことではあるが、尙、農業は國民の産業中最も主要なるものであつたことは疑なき所である。即ち農は立國の基として重要なものであつた。

(二)徳川時代に於ては米を貴ぶの思想は殊に甚しきものがあつた。『米穀は人の命にかゝわり候物にて無此上大切なるものに候』とか『金銀はいか程澤山にても金を喰ては一日も送らるゝ物にては無御座候』とか、『穀は民の食物也。食は民の天也』などゝいふの類は枚舉に遑なき程で

あつて、貴穀賤金の思想は當時一般の思潮であつた。かくの如く、人民一般の生命を維持する主要なる食料、即ち米の產出を掌る農業が、一般に重要視されたのは當然のことゝいふべきであらう。

(三)米は國民生活上重要なものみならず、當時に於ては、國家の經濟がすべて米穀で以て切り盛りせられ、石高で所領の大きさを示し、大名旗本一般武士に至るまで主として米穀で以てその俸祿を受けたのみならず、國民多數の所得はこれによつていひあらはされ、又ある程度まで貨幣の作用をなしたものであつて、當時は決して今日の如き貨幣經濟の世ではなく『米遣ひの經濟』の時代といつても決して差支なき狀態であつた。即ち米穀は幕府諸藩の財政上の根源であつたのみならず、國民經濟一般の狀態も亦これによつて推察さるゝの有様であつた、従つてこの米穀を生産する農業は頗る重大なるものと考へられたのは、故なきことではない。

(四)更に對外關係から見れば、徳川時代は殆

んど鎖國の時代であつて、現今の如く自由に外國と交易するの途開かれず、爲めに國內の人口は國內の米穀を以て養はざる可らず、従つて米穀生産額の多少は直ちに國民生活の安危に至大の關係を及ぼした。これ農業が大に重んぜらるるに至つた理由の一つである。

(五)前述の如く米は幕府諸藩の財政の根源であるが、時代の推移に伴ひ、諸種の事情から幕府も各藩も財政の困難に陥るに至つた。尤これが救済策として或は經費の節約とか、又は貨幣改鑄による出目を利用する方法も採られ、其外、各地各藩に於て所謂國產獎勵の手段に出でたものであるが、一般に農業の開發、米穀の増産による歳入の増加といふことも盛んに行はれた所のものであつた。されは農業の重要は、幕府諸藩の財政の根源といふ一般的原因より一轉して、財政窮乏を救ふものとして更にその重要を加ふるに至つた次第である。

要するに當時に於ける重農の原因としては、以上五者を數へ得ると考ふるが、その中、第一

乃至第三に掲げた處のものが最も根本的のものであつて、對外關係及び財政困難の二者は何れも第二次的のものであり、又前三者に比すれば後に至つて生じた處の原因である。而してこの農業の重視に伴つて幕府諸藩の勸農政策が起り、又これと相伴つて徳川時代における農業の大なる發達を見るに至つたことは論する迄もない所である。

三

かくの如く徳川時代には農業は著しく進歩し、又最も重要な産業とせられた次第であるが、然らば當時農民の狀態はどうであつたかといへば、それは意外にも、彼等はその一舉手一投足に拘束を受け、たゞ租税を輸す爲のみに存在しておるか³⁾の如き慘しめな生活をなしたものであつた。校合雜記に家康の談話として引用せる『難儀にならぬほごにして氣まゝをさせぬが百姓共への慈悲なり』とか、或は本多正信の『百姓を治るの法は一年入用の食料だけを残して其餘は年貢に取り、彼等の手許には財の餘らぬ

様に且つ不足なき様に治むへし』といへる主義が實行されたものであつて、纔に飢餓を免る、だけの生活をなしたに過ぎぬ。決して農民が國の御實として厚く保護せられた譯のものではない。——このことは既に瀧本博士が嘗て本誌第七卷第六號に於て多くの事例を擧げて説明しておらるゝ所であつて、茲にこれを贅するの必要はない。

四

農民の狀態が既にかくの如くである以上は、當時の『農は國の本なり』といふ詞の眞の意味は果して如何。瀧本博士は前掲論文に於て『其實農民を農民とし重したるものにあらず、一般衆庶の生活上必要なる食料の生産に従事するが故に之を重視したまでのことであつて、上は君主を始め社會の上流に立てる武家武人と雖も皆農民の力耕に依らざれば一日も生存すること能はずと云ふの主意に出でたるものにして畢竟農民は國君及諸士の爲に貢租として食料を供給するが故に重せられたのである』今此等の事實を

回想するときは徳川時代に於ける重農の言は全く一の *hokey* (詭言) に外ならざることを知るべし』と説いておらるゝ。即ち農民は農民として重要ではないが、米を生産する者として重要である。換言すれば農民を二個の方面から觀察して、一方では重要ではないが、他方では重要である。故にこの詞は一の詭言であると説かれてゐるものゝ如くである。

余はこの問題は單に農民の生活といふ一方面のみからではなく、農業といふ方面からも考へて見なければならぬものであると思ふ。而して農業が當時頗る重要なものであつたことは既に上述の如き種々の理由から之を肯定することが出来る。かくの如く考ふるならば、農民を二個の方面から觀察して其一を以て重要とし、從て重農の語を以て一の詭言なりとするの必要なく、短刀直入的に、農本、重農の農は農業そのものを指したものであつて、農民を指すものではない、換言すれば當時の農本主義は農業本位主義であつて、農民本位主義ではないと説明し

4) 日本經濟叢書卷一、19 頁

5) 近著、『經濟一家言』にも收む、

て差支なきのみならず、寧ろその方が簡明ではあるまいか。

五

當時の學者は異口同音に農は國の本なりと唱へておるが、其所謂「農」の意義については、必ずしも一定してゐない。或は農民の意に解するものあり（例へば武元立平の勸農策に農民は國の本にて云々）、又農業の意味に解するものあり（例へば本多利明の經世秘策に農業は國の本なれば云々）、又或は兩者を共に包含せしめてゐるものもある（例へば徂徠の政談に於ける如し）、又同一人に就いてもその用例は必ずしも明白ではない。然しこれは學者の政策論であつて、當時の學者が如何なる意味で重農の語を用ゐたにしても、農民や農業の實狀から考へれば、重農の眞義は上述の如くでなければならぬと思ふ。

六

重農の意義を説いた關係上、尙、序ながら、徳川時代の社會階級を示すものとして屢々用ゐられた士農工商の詞について一言したい。

雜錄

徳川時代に於ける本農の意義に就て

この語の解釋についても、從來は武士が最上位を占め、農民これに亞ぎ、工商民は不生産的な鎗鋌の利を爭ふ者として最も排斥されたものであると解釋する者が多いように考へられる。然し實際の生活に於ては、武士は常に財政の困難に苦しみ、農民は前述の如き壓迫をうけて、人間らしき生活をなすことは出来なかつたものであるが、これに反して町人階級即ち工商階級は隱然社會の一大勢力たる地位を占め、武士の如きも彼等の融通によつて、漸く生計を維持したに過ぎなかつた有様である。

かく考ふるときは士農工商の語に對する從來の解釋では、未だ社會生活の實狀をあらはすに足らぬ。余は寧ろこの語を以て階級制度と農本主義とを採用せる時代の一種の職業觀念をあらはすものとして解釋せなければならぬと思ふ。即ち封建軍事的政治は當時の政治組織であり、國家の財政、國民の生計に密接なる關係を有する農業はこれに亞いで重要な産業であるが、工業商業の如きは當時未だその重要を認められ

6) 日本經濟叢書卷二十、575頁
8) 日本經濟叢書卷三、360,427頁

7) 拙著、經濟史研究、75頁

七

なかつたものであつて、この各階級の職業をあらはすに士農工商の語を以てしたものである。即ちこの語は各階級に屬する人民が、實際に於て重要であり、又は勢力があつたことをいふものではなく、この階級の屬する職業が如何なる程度に於て重要なるものであつたかといふことを示すものと考へねばならぬ。農業時代の當時に於て工商業が未だ重要視されなかつたことはもとより當然であらう。或は、一種の道義觀念として、武士は最も重んずべきものであり、これに次いで農民を重んずるのが當然であるといふ風に解釋し得るようであるが、然し理想と現實とは必ずしも一致せない。道義上重んずべき筈の農民が、實際に於ては甚しく虐待され、道義上卑しむべき町人は、却て實際上社會の一大勢力を成した。社會の實際生活に重きを置く經濟史家にとつては、この道義的説明を以てしては、未だ満足することが出来ぬ。寧ろ上述の如く、ある階級者の屬する職業を示すものと見る方が適當であると信する。

要するに、余は所謂農本主義なる語は農民本位主義ではなくして、農業本位主義であり、これと同じく、士農工商の語も、武士・農民・工商民を指すのではなくして、寧ろ軍事(封建政治)農業工商業の意義に解釋する方が、社會生活の真相に近き觀念を捕捉し得るものと思ふ。社會生活は絶えず發展して止む所なきものである。經濟の發達を説明する階段説の上から見ても、以上の説明は必ずしも失當ではなからう。